# プラトン哲学のイデア説に関する基礎的論考

加　藤　幸　夫*

A Study of Plato's Theory of Ideas

Yukio KATO

プラトン哲学の中核をなし，彼の生涯を通じて一貫した根本思想となっているのがイデア説である．イデア（ἰδέα）という言葉が，プラトンとともに西洋哲学史の上で不朽になっているのは，そのためである．プラトンのイデア説は，『パイドン』『国家』など，中期の諸対話篇において，その頂点に達したと見るのが定説となっている．ところがイデア説は，中期対話篇におい忽然として現れたのではなく，すでに，『ラスケ』『エウテュプロン』および『メノン』など，初期対話篇の中にも，その萌芽を見て取ることができる．だが，そこに表されているのは，いわば，単に〈イデア的思想〉といった性質のものでしかないと言えよう．

イデア的思想からイデア説への移行の過程を探ることは，プラトン哲学を解釈するための基本的な要件である．本稿は，『パイドン』および『国家』を主な手掛かりとして，イデア説の基本的構造と特性を探りつつ，イデア説をめぐる諸問題について，若干の考察を試みるものである．

## 1

『パイドン』（96A）によると，ソクラテスはかつて自然研究に強い関心をもち，事物の生成・消滅・存在の「原因（αἰτία）」を探求することに熱中していた．そして，あるとき人づてに，「万物を秩序づけ，万物の原因となるのは知性

原稿受付：平成3年6月8日
*長岡技術科学大学計画・経営系

（νοῦς）である」というアナクサゴラスの説を耳にした．そのとき彼は，「もしそれがほんとうなら，ヌースが秩序づける以上は，ヌースはあらゆるものを，全体としても個々のものとしても，まさにこうあるのが最善という仕方で秩序づけ，ところをあたえるだろう」(97C)と考えた．というのは，ソクラテスにとって，事物の生成・消滅・存在の原因を探求するということは，「当の事物がいかなる仕方で存在し，あるいは，いかなる仕方で他の何らかの働きをなしたりなされたりするのが，そのものにとって最善であるかを発見すること」(97C)を意味しているからである．

だが，実際にアナクサゴラス説に当たってみると，そこではヌースは何ら機能しておらず，また，事物を秩序づけるいかなる原因も，ヌースに帰されてはいなかった．しかも，その中で，原因として示されているのは，単に，事物の起源やその必要条件とおぼしき，物質的原因だけであった．つまりアナコサゴラスのヌース原因説は，他の宇宙論者の説と同様，機械論的説明でしかなく，その上，その説は，「ほんとうの原因」と，それがなければ原因が原因としての働きをなしえない，いわば「必要条件」とを混同しているにすぎなかった．

目的論的立場に立つソクラテス—プラトンにとって，万物の原因を探求する際の基準は，「人間自身を問題にする場合でも，ほかのいかなるものを問題にする場合でも，そもそも何が最上で最善（τὸ ἄριστον καὶ τὸ βέλτιστον）であるか」(97D2-3) ということだけであった．つまり，プラトンの探求すべき「真の原因」とは「善というひとつの適正な力（δέον）」であり，それは，「文字どおり万物を結束し統合」(99C) するものであった．

そこで，アナコサゴラスの機械的自然観に失望したソクラテスは，独自の方法で原因の探求に乗り出すのである．その方法とは，「理論的考察（λογός）という手段にうったえることによって，事物の真相を理論のうちに考察する」(99E) やり方であった．すなわち，仮説法に基づく哲学的問答法による探求である．その際に展開されたのがイデア説である．

ソクラテス—プラトンは，「『美』や，『善』や，『大』や，その他すべてそういったものが，純粋にそれ自体だけで存在する(εἶναι αὐτὸ καθ' αὑτό) (100B5-7) という仮説を，最も確かな前提として設定する．つまり，『美』や『善』など，すべてのもののイデアの存在を明確にしている．そしてさらに，このイ

デア存在説を基に「イデア原因説」が展開される．その説は，「もし，『美そのもの』（αὐτὸ τὸ καλὸν）のほかに何か美しいものがあるならば，それはただ『美そのもの』にあずかる（μετέχειν）からこそ美しいのであって，ほかの原因によるのではない．同じことは，どのようなものについても言える」（100C4-6）という言葉に代表されるものであった．

『パイドン』におけるこのイデア説は，問答法と密接に関っていて，その志向するところは，生成と消滅および存在の原因としての最善なるものを探求することにあった．そして『パイドン』での最終的な魂の不死証明も，イデア原因説およびイデア論的原理に基づいてなされたのである．

ところで，そもそもイデアとはどのような意味であろうか．
イデアまたはエドイス（εἶδος）は，イデイン（ἰδεῖν）あるいはエイデナイ（εἰδέναι）に由来する言葉であって，本来，観ること（イデイン）においてみられた「外見」「姿」「形」などの意味である．すなわちそれは，感覚を通して知覚される事物の形状や様子を意味していた．また，このような原義的意味から派生して，動作や活動の「様式」，さらには「種類」「類」といった抽象的観念を言い表す言葉でもあった．プラトンにおいても，これらの一般的意味で用いられている場合も少なくない．ところが彼によれば，感覚を通じて把握しうるものは，明るさとか，色合いとか，音色，形態等々でしかなく，けっして，事物そのものの本質とはいえない．つまり，感覚によっては，事物の「何であるか」を捉えることはできないのである．

たとえば，「徳とは何であるか」を明らかにする際，ソクラテス―プラトンがつねに問題にするのは，個々の徳目の形態・様式ではなくて，徳そのものの本質である．すなわち，感覚によって知覚される姿・形ではなく，魂（＝知性）によって観得される事物の本質的存在を問題とするのであり，そのような存在をプラトンは〈イデア〉という言葉で言い表したのである．

『メノン』においてソクラテスは次のように述べている．
「たとえ徳の数が多く，いろいろの種類の徳があるとしても，それらの徳はすべて，ある一つの同じ『相（本質的特性）』（εἶδος）をもっているはずであって，それがあるからこそ，いずれも徳であるということになるのだ．この『相』に注目することによって，『まさに徳であるところのもの』（ὃ τυγχάνει οὖσα

ἀρετή）を質問者に対して明らかにするのが，答え手としての正しいやり方というべきだろう」（72C）

また『エウテュプロン』においても，「すべての敬虔なことがらがそれによってこそ，いずれも敬虔であるということになる，かの相そのもの（ἀυτὸ τὸ εἶδος）」（6 D）という表現が示されている．

このように，イデアという言葉のプラトン特有の用法が，イデア説の前触れとして，ソクラテスの言葉の中に明示されたのである．

2

プラトン哲学の根本動機は，何よりもまづソクラテスの教説を真の意味において理解し，かつ継承し，更にそれを発展させることであった．ソクラテス的問答が，しばしば倫理的概念を主題としていたことから，プラトンが，個々の倫理的概念を規定するために，必然的に，倫理的領域に関するイデアを探り求めようとしたのは，自然の成り行きであった．

その後，中期対話篇においては，倫理的概念以外の領域におけるイデア説が展開された．アリストテレスの『形而上学』（Ｉ，987A29）によれば，プラトンは，青年時代からクラテュロスに接して，そのヘラクレイトス的な見解に親しみ，「およそ感覚的な事物はことごとく絶えず流転しているので，これらの事物については，真の認識は存在しえない」という意見を，後年にもなおその通りに守っていた．しかも，「ソクラテスは，普遍的な諸概念あるいは諸定義を，離れて存するものとはしなかった．しかるに，彼の後継者たちは，それらを切り離した，そしてそのように離れて存在するものどもをイデアと呼んだ」(XIII, 1078B30）のである．

『クラチュロス』における次の言葉は，真実在としてのイデアの本性を明らかにしている．

「事物はそれ自体で，それ自体の或る不動の有性（οὐσία）を持っており，われわれとの関係においてあるのでも，またわれわれに依存しているのでもなく，われわれのむなしい想像でもって上へ下へと引き回されることもなく，それ自体だけでそれ自体の有性との関連において，本性的に定まっている仕方で存在するのである」（386E）

プラトンは，現象的存在とは全く離れた，それ自体として存在する形相を言い表すために，「まさに何々であるところのもの」(Phaed. 74B，75D，78D)，「ものの本質それ自体」(ibid. 78D)，「まさにそれぞれのものであるところのもの」(ibid. 65D)，「それ自体として，自己とともにある，単一な姿をもつ，永遠の存在」(Symp. 211B) 等と，さまざまな表現をしている．だがこのような表現は，イデア説が明確に組織的に展開される以前にも見いだされているものであって，『大ヒッピアス』においても，存在するものとしての「美しさ自体」(286D) が問われている．

『パイドン』以降，ソクラテスによって未だ分離されなかった普遍的なものと，常に流動する一切の感覚的事物とが，次第に峻別されていった．『饗宴』では個々の美しい事物から美の形相へ至る道は段階的，上昇的であって，たとえ両者の対立が背景に潜んでいるとは言え，それは前面に現れておらず，また，肉体と魂の対立も，わずかにパウサニアス (Pausanias) の演説 (181E) で軽く触れられているに過ぎない．ところが『パイドン』においては，現象的事物とイデア，および肉体と魂との対立が対話篇全体の基底をなしている．

プラトンによれば，肉体は感覚的事物（器官）と同義的なものであり，それは，真実の探究においては妨害となるのである．感覚のうちで最も明晰な視覚や聴覚さえも，厳密さや正確さを欠き，「われわれの目にし耳にするものは何ひとつ定かではない」．何かを考察するにあたって，そこに肉体がいっしょに加わるときは，明らかに魂は，肉体に欺かれるのである．つまり肉体は，知恵の獲得にとっては妨害となるのであり，「事物の真相がすこしでも魂に啓示されうるような場合をもとめるとすれば，それは，思惟 (λογίζεσθαι) のはたらきのうちにおいて」(65C) である．ところが，この思惟のはたらきが最もよく行われるのは「魂が肉体的な何ものにも――聴覚にも，視覚にも，苦痛にも，快楽にも――わずらわされることなく，肉体を振り切ってできるだけ純粋に魂そのものだけとなり，そして可能なかぎりは肉体との共同も接触もしりぞけながら，ひたすらものの実相(τὸ ὄν)をめざしてあこがれ努力するとき」(65C) である．したがって，知を求めてやまない真の哲学者の魂は，とりわけ肉体を蔑視してそこから逃れ，純粋に魂そのものだけになりきろうとつとめるのである．なぜなら，肉体を介する感覚でもって，『正しさ』や『美』や『善』など，その

他『まさにそれぞれのものであるところのもの』として定式づけられる，すべてのものの本質（$o\dot{v}\sigma\acute{\iota}\alpha$）について，その真実を観得することはできないからである．つまり，真実在（イデア）の探求とは，「感覚から離れて，純粋な思考（$\delta\iota\tilde{\alpha}\nu o\iota\alpha$）をそれ自体だけで用いながら，ひとつひとつの実在を，その純粋な姿のままにそれ自体として追及すること」（66A）である．

純粋な思惟･思考の対象としての真実在は，単一の形相（$\mu o\nu o\epsilon\iota\delta\tilde{\epsilon}$s）をもち，純粋にそれ自体だけであるかぎり，つねに同一の状態を保ち，いかなるときにも，いかなる点においても，けっして何ひとつ変化を受け入れず，恒常不変である．他方，現象的事物は感覚の対象であり，実在とは全く反対に，自己自身との関係からみても，お互いに対する関係からみても，片時も恒常のあり方を保つことはありえないのである．

すなわち，存在するものには二つの種類があり，一方は見えざるもの（$\dot{\alpha}\iota\delta\tilde{\epsilon}$s），他方は見えるもの（$\dot{o}\rho\alpha\tau\tilde{o}\nu$）である．前者は，「神的なもの，不死なもの，知性の対象となるもの，単一な形相をもち，分解を受け入れず，つねに自己自身のあり方を変えない恒常的な存在であり，魂はこのような種族の存在にこそ，最も性格上の共通性をもっている．他方，後者は人間的なもの，死すべきもの，雑多なかたちをとり，知性にかかわりなく，分解されるべき運命にあり，片時も自己自身のあり方を恒常的に保たぬものであり，肉体のほうはこのような種族の存在にこそ，最も性格上の共通性をもっているのである」（80B）．

## 3

ところでプラトンによれば，数学的領域は見えざる種類の存在に属するのである．彼の対話篇において，数学的用語ないし表現が初めて示されているのは『ゴルギアス』である（450D，451BC，465BC，508A，etc.）．だがそこでは，イデア説との結びつきはまだ希薄である．また，『メノン』や『パイドン』における数学的概念の認識は，形相のそれと同様に，「想起」に根源をもっている（Men. 82B sqq., Phaed.73A）．ところが，その後，『国家』においては，数学的なものとイデアとの密接な関係が明確に指摘されている．プラトンによれば，計算したり数えたりする能力は，本来，知性を目覚めさせるように導く性格を備えていて，実在するものへと全面的に引っぱって行く力をもっている

(523A). そして, ⟨—⟩ などの数（ἀριθμός）について学ぶことは,「実在の観想へと魂を向け変えて導いて行くようなものに属する」(525A) のである. つまり, 計算術や数論の扱う数は, 真実在へと導くものであり, それは,「ただ思惟(διάνοια) によって考えられることができるだけで, 他のどのような仕方によっても取り扱うことのできないような数である」(526A). それゆえ, 魂そのものを生成界から真理や実在へと向き変えさせるこの学問を, 真の哲学者は学ばなければならないのである. なぜなら, 彼らは, 生成界から抜け出して実在に触れなければならず,「もしもこのような学問を学ばなければ, 思惟の能力ある者とはけっしてなれないからである (525B)」.

その上, 計算術や数論といった学問は, 魂をつよく上方へ導く力をもち, 純粋な数そのものについて問答するように強制し, 感覚的事物としての数を魂に差し出して問答しようとしても, けっしてそれを受けつけることはしない(525D). それゆえ, この学問こそは, 人間にとってほんとうの意味で必要欠くべからざるものである. というのも, それは,「魂を強制して, 純粋の知性そのものを用いて真理そのもの(αὐτὴν τὴν ἀλήθειαν) へと向かうようにさせるからである」(526B).

以上のような指摘は, 幾何学についても同じように言える.
幾何学においては, 可視的な図形（διάγραμμα）を補助的に使用するが, その場合, 思考の対象となるのは, 描かれている図形ではなく, その図形を似像(εἰκών)とする現物そのものである. つまり, 可視的な図形における等しさは,「真の等しさ」すなわち「幾何学的等しさ」(Gorg. 508A) とは別のものであり, 真の図形は現実界には存在しないのである. それゆえ, 幾何学に通じている人は, 可視的な図形を見て, その図形の中に何らかの正確な数量的関係の真実のあり方を, 直接とらえるようなことはしない (529E). つまり, 幾何学の論証は四角形そのもの, 対角線そのものなどのためになされるのであって, 図形として描かれる対角線や四角形のためではない. なぜなら,「幾何学が知ろうとするのは, つねにあるものであって, 時によって生じたり滅びたりする特定のものではない」(527B) からである. 幾何学の真の目的は, 実在を観想するように促すことであって, 生成を見るようにさせることではない.「幾何学は, つねにあるものを知る知識」(527B) である.

以上のことから，数学的領域とイデアとの関係は明らかである．数論や幾何学において，不可視的対象すなわちイデア（真実在）を認識するのは，「思惟」であり，思惟こそが可視的な象形（図形）から離在してある『大』『小』『等しさ』『一』『二』等を把握するのである．この思惟によってのみ，絶対的に正しい推論がなされるのである．このようにしてわれわれは，一切の数えうるもの，測りうるものを支配するイデアの存在を認識するのである．

4

プラトンによれば，以上のような考察は倫理的領域においても可能である．「《正》と《不正》，《善》《悪》，およびすべての実相（エイドス）についても，同じことが言える．すなわち，それぞれは，それ自体としては一つのものであるけれども，いろいろの行為と結びつき，物体と結びつき，相互に結びつき合って，いたるところにその姿を現すために，それぞれが多（多くのもの）として現われるのである」(Resp. 476A)

つまり，地上界における，具体的な個々の美しいもの，正義なる行為，善なる行為など，いわゆる感覚的事物は，数論および幾何学における可視的な形象（図形）に匹敵し，その果す役割も形象に類比されるのである．そしてわれわれは，感覚的事物や現象的存在を介し，ただ思惟によってのみ，『美そのもの』『正義そのもの』『善そのもの』などを認識するのである．それは，常に可変的で流動的な感覚的事物から離れた普遍的な存在の領域である．このことは，つぎの言葉によって明確に示されている．

「多くの美しいものがあり，多くの善いものがあり，また同様にしてそれぞれいろいろのものがあると，われわれは主張し，言葉によって区別している．われわれはまた，『美そのもの』があり，『善そのもの』があり，またこのようにして，すべてのものについて，こんどは逆に，そのそれぞれのものの単一の相に応じてただ一つだけ実相（イデア）があると定め，これを《まさにそれぞれであるところのもの》と呼んでいる．さらにまた，われわれの主張では，一方のものは見られるけれども，思惟によって知られることはなく，他方，実相（イデア）は思惟によって知られるけれども，見られることはない」(Resp. 507 B)．

このようにしてイデアは，それが本来もっていた「見る」という意味から離れて，論理的概念となった．そしてまた，プラトンの展開方法も一貫して論理的傾向が濃厚になった．ところが，イデア論の問題点もこの点にあった．そもそも，倫理的領域における普遍的直感的な知として求められたイデアが，その後，知識一般に拡張され，倫理的領域以外におけるあらゆる知識にも，その明証が求められた．例えば，《一》なる形相は永遠なる完全性において，それ自身感覚的個物から離在的に存在するとともに，他方においては，多数の個物の中にその本質として内在しなければならなかった．数学的諸対象と結びついて展開されたイデアは，倫理的領域ならびに数学的領域を実在として構成する原理であったばかりでなく，あらゆる生物ないし有機体の種概念もしくは類概念に変化していったのである．

## 5

ところで，イデアと現象的事物との関係はどのうように考えるべきであろうか．

『パイドン』（100C）によれば，「もし，『美そのもの』のほかに何か美しいものがあるならば，それはただ『美しいもの』を「分有している」（μετέχειν）からこそ美しいのであって，ほかの原因によるのではない」．すべて或るものを美しくするものは，その美しい事物に『美そのもの』が，「臨在」（παρουσία）するか，あるいは「共有」（κοινωνία）しているかのために外ならない．つまりこれは，単に美の形相と美しい事物との関係のみならず，一般に，形相と現象的事物との関係を示すにあたって，プラトンがしばしば用いた表現である．もしもわれわれが，＜x，y，zは美しい＞というならば，この命題は二つの意味を含んでいる．一つには，「美しさ自体」は，xが美しい，yが美しい等という個々の場合を離れて，美しさ自体の意味をもっていること．二つには，個々の場合のx，y，zはそれぞれ何らかの仕方で，美しさ自体の意味を「分有する」ということである．それゆえにx，y，zは共通に一つの意味をもち，前者の後者に対する関係は主語の述語に対する関係で表現される．したがって，個物はイデアを述語とするいわゆる〈述語の束〉である．

先に引用した『パイドン』（100C）の言葉について言えば，主語が述語の共通の性質を「分有」しているか，あるいは述語が主語と「共に有する」か，ま

たは「臨在する」かによって，事物が美しくあるのである．この三つの語のうち，初期の対話篇では主に「臨在」が用いられていたが，この語は，『リュシス』では或る保留のもとに用いられ，『饗宴』ではまったく姿を消している．そこでは，美の形相が美しい事物に臨在するのではなく，むしろ，個々の美しい事物が「至上の美を分ちもっている」ことによって，美しくなると示されている(211 A-B)．だが『パイドン』では，これらの言葉を区別することには，それほど重きが置かれず，「すべて美しいものは『美』によって美しい」(100D）というように，それは，もっぱらイデアによると主張されている．更にこのほかにも，個物と形相との関係は，「分取する（*μεταλαμβάνειν*）」とか，あるいは軍用語を転義的に用いた「占有する（*κατέχειν*）」という言葉によっても示され，後者は魂の不死の最終的な証明において，一定の個物と一定の形相との間の特殊な関係を示すのに用いられている．

『国家』以後においては，イデアが個物の「範型」（*παράδειγμα*）であると言われたが，それに応じて両者の関係も「模倣」（*μίμησιs*）に変わった．そして，「分有」あるいは「臨在」から「模倣」に至る過程は，「憧れ」（*ὀρέγεσθαι*）という言葉に表象される．例えば，『パイドン』においては，「すべて感覚のうちにとらえられる等しい事物は，『等しさそのもの』に憧れながら，尚不完全なるところがある」(75A-B）と言われている．

これまでの考察からして，イデアと現象的事物との関係を示す表現は，一般的に，「分有」を中心概念とするものと，「模倣」を中心概念とするものとに分けて考えることができる．しかしプラトンは，そのいずれに関しても，詳しい説明を施してはいない．アリストテレスによれば，「ピタゴラスの徒は存在する事物がそのように存在するゆえんを，数に《模倣すること》によってであると言っているが，それをプラトンは，《与かること》によってとしているのである．しかしとにかく，イデアに与かるとか模倣するとかということは一体なんのことか——このことについては，彼らはこれを共同の研究課題としてわれわれに残した」(『形而上学』1，987B11)．ここに示唆されている難点について，プラトンはおそらく『パルメニデス』に至るまで意識しなかったと思われる．それというのも，前半期の対話篇のうち最も浩瀚な『国家』の中では，イデアを「模範・範型」として語るとともに，それと並んで「臨在」「分有」「共有」によっ

て，イデアと個物との関係が説かれているのみならず，『ソヒィステース』において取りあげられた形相相互の共有の可能性が，『国家』では，特に問題意識なしに認められているからである（Resp. 476A）.

以上のようなイデア論をめぐる諸問題について，全体的かつ整合的解釈を試みるためには，今後，プラトンの後期対話篇『ソフィステース』および『パルメニデス』等の十全な分析を踏まえた総合的考察が求められる.

使用テキスト

J. Burnet (ed.), Platonis Opera, (O.C.T.)　1899-1906 (repr. 1973)

『プラトン全集』岩波書店　1976

『パイドン』藤沢令夫訳　筑摩世界文学大系3　1986

参考文献

R.S.Bluck, *Plato's Phaedo,* London, 1955

F.M.Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1939

R.C.Cross and A.D.Woozley, *Plato's Republic*, London, 1964

D.Gallop, *Plato Phaedo*, Oxford, 1975

S.D.Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1951

A.E.Taylor, *Plato*, London, 1926

田中美知太郎　『プラトンII』(1981)，『プラトンIII』(1982) 岩波書店